

# 猫蓑通信

第 80号  
平成 22年  
(2010年)  
7月 15日発行  
(年 4回発行)



トン、トン、バーン

青木秀樹

正岡子規が、明治二十六年に『芭蕉雑談』の中で発表した、いわゆる「連句非文学論」は、連俳（連句）に貴ぶものは変化であり、その変化は終始一貫した秩序と統一の間に変化するものではなくて、全く前後の関連のない突然の変化であるから、そのようなものは文学として認められない、というものであった。

連句の祖である連歌は和歌の上の句と下の句をふたたびが応答して作る付合から始まり、それが多人数で上の句と下の句を交互に詠む長連歌に発展、そこから俳諧之連歌が派生した。貞門派の俳諧、談林派の俳諧を経て、俳諧を文学として完成させたのが松尾芭蕉であった。いま私たちが学んでいる蕉風連句は、独立した長句と独立した短句を交互に付け合うことで成り立つ。前句で用いられた言葉の関連で付ける、前句の句意からの連想で付ける方法から、前句と付け句の間の余情を接着剤とした付け方へと変じている。

二条良基の『連歌新式』をはじめとして連歌・連句の式目書が数多く刊行されたのは、座を正し、作品に変化をもたらすために必要であったからであ

る。式目書を残さなかった芭蕉であるが、「たとへば歌仙は三十六歩也。一步も後に帰る心なし」(三冊子)という芭蕉の言葉は、連句の真髓が変化にあることを言っている。

一般に文学といわれるもの、詩歌、小説、戯曲、随筆などにはテーマや主張がある。それに比べて、座の文芸と言われる連句一卷にはあらかじめ決められた「テーマ」や「主張」がなく、「道筋」も決められていない。一座して、前句に付けそして転じることがをひたすら繰り返すだけである。

連歌の時代からある一卷の展開を能楽と比べた序破急の論はいまでも連句の構成の基本となっており、寺田寅彦の音楽や映画と比較した俳論はいまでも新鮮である。さらにロシアの映画監督エイゼンシュテインの「モンタージュ理論」は俳諧をヒントにした映像理論であり、連句創作と映画・演劇との間には「展開」に関して相通じるものがあるように思われる。

先日(六月三日)朝日新聞夕刊の「人・脈・記」の中で脚本家橋本忍氏の脚本創作に関するエピソードが紹介されていた。氏は黒澤明監督の「七人の侍」「生きる」など多数の脚本を書いた大御所である。そのひとつは松本清張原作の「砂の器」の映画化にあたり、野村芳太郎監督から頼まれて当時松竹の助監督であった山田洋次氏を指導しながら脚本を書いた時のこと、「人間の集中力はそんなに続かな

## ●目次

第二十四回藤祭連句興行	二十韻十三巻	2	
二階のお稽古	正式俳諧執筆を終えて	式田恭子	6
天神様はなぜ連歌俳諧の神様なのか	関係性の文学	鈴木了斎	7
空擲考		小池正博	8
無心所着考		東明雅	10
温故知新・2	世阿弥能楽論に見る隙間の魅力	東明雅	11
美奈ちゃんのお父さんとK先生(上)	小野フエーラ雅美	猪苗代兼載五百年祭	12
「まなとも連句会」	昨今	林 鐵男	14
事務局だより		山寺たつみ	14

い。シナリオをイメージする時間は数分だろう。一休みし、また集中する。原稿用紙をにらんで他のことを考えるのはいい。だけど鉛筆だけは離さない方がいい」と教えた。何か連句の席にいる連衆への助言のようにも思われる。

もうひとつのエピソードは弟子とした脚本家中島丈博氏(大河ドラマなど作品多数)に伝えた橋本直伝の脚本のコツに「順番とリズム」がある。一つひとつのシーンをどうつなげていくか、正しい順番があると中島氏はたたき込まれた。「等間隔ではない。トン、トンと重ねたら、観客が思う次のシーンより先へ飛ぶ。トン、トン、バーンだ。飛び過ぎるとついてこない。どこまで飛ぶか、数式では計れない」。観客を意識した見せ方、面白い展開を考えることは、まるで連句の付けと転じのコツが語られているようである。

1・辛夷の座

二十韻「笙筆策」

原田千町 捌

藤棚に笙筆策の響きけり 千町  
 むすびし水に亀の鳴く頃 司  
 パンコンのバージョンアップうららかに 千恵子  
 けん玉遊び子等は熱中 郁子  
 ウ 夕立の後にすがしき月上がる 遊民  
 待合せには藍浴衣着て 幸子  
 縫るかにそつと酒注ぐ細き指 酔山  
 山の出湯に睦みぬる猿 郁  
 はからずもホールインワンしてしまひ 山  
 僕も年金貰へるかなあ 恵  
 ナオ 冬の海深く生命を育みて 同  
 化石は眠る厚き断層 民  
 心中の道行キャンデーなどを舂め 司  
 六道輪廻それでいいちゃん 民  
 新聞を配る有明月を背に 幸  
 義父と孫とで捌く秋鱈 山  
 ナウ 収穫の済みし故郷安らげり 郁  
 染色陶芸流行る昨今 民  
 幻の花を求めてなほ遠く 町  
 学校帰り雉のほろほろ 幸

連衆 玉城 司 鈴木千恵子 東 郁子  
内田遊民 飯島幸子 吉田酔山

2・山桜の座

二十韻「藤いまだ」

鈴木美奈子 捌

藤いまだ紫淡し太鼓橋 美奈子  
 亀鳴く声のほそき池の面 良子  
 めかり時国の行方を尋ねゐて 敏  
 深煎珈琲前に蘊蓄 要子  
 ウ 寒満月連山ぐるり磨きゆく 守男  
 身を切る風にふたり寄り添ひ アンズ  
 空港のキスのアングル四十五度 良  
 くらつとしたるウォッカハラシヨー ア  
 指先に地球儀まはす独裁者 守  
 笑つて沈む人形の首 敏  
 ナオ 夏芝居知らざあ言つて聞かせやせう 要  
 梅雨の晴間に鶴嘴を振る 良  
 新しき入れ歯鯛の噛み具合 ア  
 峠あやふしミヤンマーを脱げ 敏  
 海桐の実あなたの地雷踏みさうに 守  
 月の舟揺る君をのせしが 要  
 ナウ 小重陽馳走を盛れる藍の皿 良  
 円空仏の涙流せる ア  
 花吹雪なり劫罰を忘れ去り 敏  
 遅霜ながら還る飛行士 守

連衆 本屋良子 秋尾敏 山本要子  
近藤守男 松島アンズ

3・桜桃の座

二十韻「宇宙から」

秋山志世子 捌

宇宙から帰還の直子藤かをる 志世子  
 亀は鳴いたか雨降りの池 了斎  
 春コートぴつたり似合ふ嬉しさに 達子  
 母より上手く作るスイーツ 碧  
 ウ 月見客縁に集へば歌ひ出す 佐紀子  
 声も素肌もさはやかな女 碧  
 君の焚く紅葉が今も胸に燃え 斎  
 窓から海を望む止り木 同  
 韓国船沈没の謎とけぬまま 同  
 旅の一座がけふは餅つき 達  
 ナオ 大根を両の手に提げ歩み来る 佐  
 尻尾を振つて離れない犬 同  
 右向けと言はれりや右を向く私 斎  
 娶つてみればいつもへんねじ 碧  
 鯖を焼く漢が独り月の下 斎  
 鍋釜の鳴る深夜トラック 達  
 ナウ クツシオンに包まれ眠る阿修羅像 斎  
 帷を透かし覗くわらんべ 佐  
 楽の日は花見も酒もしたたかに 達  
 てふてふに聞くてふてふのこと 碧

連衆 鈴木了斎 篠原達子 松本碧  
間佐紀子



4・木蓮の座

二十韻「学びつたへよ」 生田日常義 捌

千載の学びつたへよ藤祭 常義  
 二礼二拍手春装の人 泉子  
 猫の仔を貰つてと書き貼紙に 久美子  
 有機野菜を通販で買ふ 敦子  
 路地裏の夜啼きうどん屋仰ぐ月 政治  
 愛編みむめも長いマフラー 泉  
 振ったつもり振られて恋のやり直し 久  
 檸檬の大樹並木真直ぐ 同  
 ひたすらにボクサイイズを終日 敦  
 データはすべてパソコンに入れ 泉  
 ナオ 地下宮殿水を湛へて緋鯉群れ 久  
 ふとしたはづみ落ちた夏帽 泉  
 少年がハモニカで吹くレクイエム 志  
 蟪蛄夫人磨くつけ爪 敦  
 満月に妊り告げにやつて来る 泉  
 村芝居終へ静かなる宵 志  
 ナウ 縦思考そろそろ止めてリタイアと 泉  
 手焼き煎餅ばきと割りたり 敦  
 夢と紛ふ花の盛りの普賢象 久  
 棚田の里に雲雀囀る 志

連衆 青木泉水 副島久美子 武井敦子  
 峯田政治

5・梅桃の座

二十韻「撫牛に雨」 須賀敬子 捌

撫牛に雨こまやかや藤祭 敬子  
 玉砂利を踏む炬燵ぎの頃 佳之子  
 山笑ふ訓辞原稿書き上げて 香織  
 ついつい髭に手を添へる癖 有子  
 セーヌ左岸人影もなく昇る月 秀樹  
 秋の窓辺の君に歌へる 有  
 利酒にほろりと酔ひし幼妻 之  
 丸も四角もほぼ同じでしょ 樹  
 予備校の名物講師問ひつめる 織  
 無重力でも出来る散髪 之  
 ナオ 金魚玉電波時計の逆さまに 有  
 雷除けの護符を貼りつけ 有  
 親譲り生まれた息子またでべそ 之  
 この餡パンは本家特製 樹  
 嬢さんと駕寝る月の逃避行 織  
 悴みし肩そつと抱きよせ 之  
 ナウ 早慶戦親父と倅敵味方 織  
 調子つ外れのエール交換 敬  
 満開の花にふはりと牡丹雪 有  
 まだまだ遅い信州の春 樹

連衆 染谷佳之子 平林香織 佐々木有子  
 青木秀樹

6・木瓜の座

二十韻「撫牛の」 棚町未悠 捌

撫牛の頬ぬらす雨藤祭 未悠  
 お守り札のぬき手触り かりん  
 春シヨール椅子にふはりとかけるらん 弘子  
 下のぼうずがサックスを吹く ゆみを  
 汗拭ひさつぱり顔の丸い月 美恵  
 柳ばしには恋炎ゆる舟 人  
 人力車ささめごとなど聞かぬふり 恵  
 次々生まれ新党の旗 弘  
 抜けた歯は役に立たぬと縁の下 恵  
 地獄の沙汰も金よ・金・金 恵  
 ナオ スペインのサッカー界で名を上げて 悠  
 寒天造る山間の小屋 弘  
 亡き父の書齋に残るたばこ盆 弘  
 チャタレー夫人の話身に入む 恵  
 十三夜餅のひとは嫁ぎゆき 恵  
 盞重ね新酒酌むべし 同  
 ナウ 近頃は気の向くままにひとり旅 弘  
 ひょうたん島は夢のまにまに 弘  
 宇宙から日本語響き花の笑み 悠  
 ピンに刺したる蝶々の列 悠  
 恵

連衆 登坂かりん 市野沢弘子 青島ゆみを  
 山口美恵

平成二十二年四月二十二日  
 於 亀戸天神社

7・躑躅の座

二十韻「いとおしや」 横山わか 捌

いとおしや小雨をつつむ藤の房 わこ  
 輪を画きては消ゆる春水 あかり  
 サークス団ふらここの技評判に 暁巳  
 僕のビデオはいつもピンボケ あや  
 手にさげる焼酎うれしと歩む月 鄭和  
 外寝のふたりのぞき厳禁 や  
 初めてと言われ戸惑ううぶな奴 り  
 キャビアフオアグラ錠をおろして 巳  
 富士山も測り直せば低くなる や  
 車社会の汚す結界 り  
 ナオ 別珍の足袋裏にして干す 和  
 大店の女中頭に袖の下 巳  
 縁切れマネードルで頂戴 同  
 夕月夜英語教師の声甘し や  
 子規を頼みの柿熟れる村 和  
 ナウ 修道院門扉閉じられ虫すだく 巳  
 夢まぼろしの万葉の道 あ  
 花吹雪浴びたる髪を旅の湯に り  
 紅貝残す波のやさしさ 和

連衆 中田あかり 島村暁巳 中林あや  
 高山鄭和

8・蘇芳の座

二十韻「まだ固き」 西田一枝 捌

まだ固き藤房揺らす針の雨 一枝  
 連歌所跡に亀の看経 雅子  
 定期便春潮の島めざすらん 孝子  
 ベースボールを覚えてる子等 凡  
 月仰ぐそこはかとなき涼風に 實  
 浴衣の襟に撫でるおくれ毛 孝  
 中吉のおみくじあげるまた逢はう 實  
 生憎ながら会の先約 孝  
 株の値はネット画面に乱高下 凡  
 刃毀れのごと党を出る人 雅  
 ナオ 狼の遠吠えに銃筒して 同  
 八目鰻の脂のりたる 凡  
 楊貴妃の夢に溶け入る秘酒の盃 孝  
 添寝の枕はづす顔なし 枝  
 同じ道行きつ戻りつ秋の暮 實  
 山の影あり月の光げあり 雅  
 ナウ 面差のぢちを思はず村芝居 實  
 趣味で集めし根付あれこれ 凡  
 花冷のマリア観音懐に 孝  
 巢立の鳥を写すデジカメ 執筆

連衆 武井雅子 坂本孝子 中川凡  
 梅田實

9・山藤の座

二十韻「穀雨かな」 横井土郎 捌

銅葺の屋根艶やかに穀雨かな 土郎  
 昇殿三拝鸞の鳴く頃 淳子  
 シヤボン玉ひいふうみいと数へみて 節子  
 母の縫ひたる小切巾着 央子  
 祭舟月の出を待ち漕ぎ出でん 健  
 鬼灯市で君と馴れ初め 節  
 あどけなき振りも手管のしたたかさ 淳  
 わたくしエステあなたゴミステ 央  
 ポイントで乗る飛行機に火山灰 淳  
 誰と組まうか日夜迷走 節  
 ナオ 懐を北風小僧吹き抜ける 健  
 持たざる人も庭に万両 央  
 ナンバーワン張る夢を抱きホステスに 淳  
 牝鹿の匂ひ内に潜めて 節  
 誇らかに裸身をさらす月燦々 淳  
 嫗の栖古酒も新酒も 淳  
 ナウ イチローも松井も快打途切れなく 健  
 小銭集める街の道化師 節  
 花吹雪車椅子押す手に肩に 同  
 桶の天下で浅蜷安眠 央

連衆 上月淳子 長坂節子 遠藤央子  
 由井健



10・海棠の座

二十韻「幣振るや」

野口明子 捌

幣振るや藤房ほのと香りたる 明子  
 額づく肩にやはらかき東風 曜子  
 春スキー休暇たっぷり遠出して 英子  
 リュックサックにチョコやフォカッチャ 路子  
 ウ 鼻声で誰かがうたふ月涼し 鐵男  
 羅に透く豊満な胸 路  
 年下の彼が自慢の社内婚 英  
 エコポイントで伸びる売上 男  
 エンデバーこれが最後の宙の旅 路  
 ナオ 天災地変早く知りたい 英  
 蔵王嶺を朝夕仰ぎ納豆汁 男  
 並んで歩く木の葉散る中 曜  
 べそかきの娘に見事騙される 男  
 仔犬の名前アラン・ドロンと 英  
 月光に微笑み給ふ磨崖仏 曜  
 美術展から入選の文 明  
 ナウ 秋鯖がやたらに獲れたけふの漁 男  
 とろりとろりと酔うて候 路  
 二条城誇らかに花纏ひをり 英  
 園児等遊ぶ淡雪の道 路  
 連衆 倉本路子 佐古英子 林 鐵男  
 前田曜子



11・雪柳の座

二十韻「歌膝に」

松原昭 捌

歌膝に坐る執筆や藤まつり 昭  
 吟声清し芳春の席 文子  
 弥生山電気自転車連ねぬて 忠史  
 仲良く分けるいなりおむすび 泉美  
 ウ 新聞地同じべランダ照らす月 恭子  
 僕ホタル族蛭なつかし 文  
 ささやかな倅せさがす北の旅 恭  
 怒った顔もやけに愛しい 泉  
 運慶と快慶作の仁王立ち 史  
 噴火の煙欧州は麻痺 文  
 ナオ 炊き出しのホットドリンク長い列 史  
 サッカーの子にピント合はせる 泉  
 建替の劇場にさよなら告げ涙 文  
 肌も心もうづく七夕 恭  
 織き月若き小姓に首つたけ 恭  
 流れる舟を追ひかける鹿 泉  
 ナウ 岸壁の母は自宅で待機中 史  
 八十路爺とて保険断る 昭  
 乾杯は大関飲まん花の昼 文  
 枝から枝へ遊ぶ鶯 泉  
 連衆 橘 文子 式田恭子 根津忠史  
 金子泉美

平成二十二年四月二十二日  
 於 亀戸天神社

藤祭連句興行の各作品と、藤祭正式俳諧作品（次ページ）は、  
 伝統的な懐紙に毛筆墨書したものを約一ヶ月後に亀戸天神社  
 に奉納します。奉納当日の直会の後、奉納各巻の捌が集まっ  
 て二十韻一巻を巻くのが恒例です。左の一巻はその一つ。

二十韻「五歳のみづら」 鈴木美奈子 捌

青葉して五歳のみづら浄らなる 美奈子  
 薄暑の風の香る神前 昭  
 運河へと窓開け放ち淹れる茶に 未悠  
 FM放送選ぶチャンネル 常義  
 横顔もあなた好みの丸い月 わこ  
 ウ 尾花の道を通ふ牛車ぞ 一枝  
 忍び音の秋の別れの辛かりし 士郎  
 岩波文庫寝ころんで読む 敬子  
 毛筆の法事の知らせ父のふみ 志世子  
 こんな田舎に来る爆撃機 恭子  
 ナオ 生牡蠣にシャブリと月と巴里の街 明子  
 斜めの帽子渋き柿色 美奈子  
 三十六歌仙扁額姫多し 昭  
 女流の棋士でキスは先手で 悠  
 夫婦には勝ち負けもなくミルクテイ 義  
 魍魅魍魎の充つる世の中 わ  
 ナウ 号外に活字の躍る建築賞 枝  
 春眠の夢覚めて儂し 郎  
 飛花落花港の見える丘の上 悠  
 大入り御礼弥生狂言 世

五月十九日 首尾 於 錦糸町・不二家

第二十四回 藤祭奉納正式俳諧

俳諧の連歌二十韻

笙の音や瑞籬渡る藤の風

文字

心字の池に蝌蚪の生れつぐ  
のどらかな被写体の顔揃ひみて

千町

幹事はいつもまめなあの人

守男

ウ 月涼しグラバー邸の窓を開け

暁巳

恋のアリアが染める夏潮

美恵

惚れたよと一言だけのこの静寂

央子

老舗統合幻と消ゆ

酔山

さし加減間違へケーキ膨らまず

有子

緊急連絡宇宙基地から

忠史

ナオ 鳥のごと飛翔を競ふ雪の嶺

志世子

旗にからまる氷塵の渦

鐵男

冷めぬまに汲め二十歳の熱き血を

了齋

蠱惑の胸に秋の紅バラ

アンズ

回顧展月の昭和の銀座裏

あや

餓鬼大将のまはすべし独楽

吉文

ナウ 托鉢の禪師の坐る迷子石

美奈子

ここから先は獣道なり

明子

咲く花も散る花もある花の旅

秀樹

呑んででは眠る惜春の縁

執筆

平成二十二年四月二十二日 首尾

於 亀戸天神社

猫養会では十月の芭蕉忌・明雅忌と、四月の亀戸天神社藤祭に正式俳諧を興行し、この二回を同じ執筆が務めます。

二階のお稽古

正式俳諧執筆を終えて

式田恭子

平成元年のある晴れた夏の日、桃径庵の二階ではなにやら母がごそそと音をたてていました。庭から声をかけても返事はなく、何をしているのだろうか。私は階段をあがっていきました。

「お母さ〜ん」と呼んだ声の最後は、二階の階段を昇りきったところで心の中に飲み込みました。母は真剣な表情でなにやらお稽古をしていたのです。母を着物を着て、紫の袴をはいて、すっすっ歩いています。

「何のお稽古？」と聞くと、  
「正式俳諧」と答えます。

そこで、正式俳諧とは、と説明をしてもらいました。父の看病に毎日二時間かかって病院に行く母は、朝早く起きて一日一時間袴をつけて練習しているとのこと。

「身体が自然に覚えるまで練習しようと思つてね」と、さらりと言う母。その真面目さに驚きました。

その年の十月、いよいよ本番の日、その日は快晴で本当に気持ちの良い日でした。私も荷物持ちとお手伝いで、朝から芭蕉記念館に伺いました。中川哲さんは母に吟声のご指導をしてくださった由、今日は宗匠です。奥さまのキヌさんは哲さんのお手伝い、ご子息の凡さんは友人の方とビデオ係をしてくださっています。私は、明雅先生、郁子先生、ご出演のみなさまにご挨拶をして、少し緊張している母の傍で荷物を片付けたりしていました。いよいよ始まります、と、知司の好敏さんがお声をかけます。私



菅公画像を背に、執筆の文台捌き。平成二十二年四月二十二日、亀戸天神社藤祭正式俳諧興行にて。

は前から二番目の列で、美奈子叔母の横に座りました。斜め前には孝子さん、真正面には淳子さん、視線でご挨拶をさせていただきました。

静々と式は進み、いよいよ執筆の登場です。きちんとしつかり役を務めている母ですが、娘としてはやはりどきどきするものです。母のがんばりとみなさまのあたたかいご協力で、無事に終了したときは心からほっとしました。ビデオの最後に、凡さんが私にインタビュウをしてくださいました。毎日練習していた母でしたので、無事終わったことをみなさまに感謝します、と話しました。

ときは流れ、平成二十一年春、その年の秋の正式俳諧の練習のために、平成元年の母のビデオを久しぶりに見ました。母は六十代、みなさまもお元気です（もちろん今もお元気です！）。練習のために見

ているのですが、いろいろなことが思い出され、胸があつくなくなってきます。また次の日、母の所作をしつと観ているとつい目頭が……。

夏の暑い日、私は袴をはいてマンションで練習をしていました。袴は母の着ていた紫のもの、文台は母が明雅先生から頂戴したものの、裏には桃径庵和子の文字が入っています。静々とその文台を捧げ持つて正面に向かいます。まずはご挨拶、心をこめてお辞儀をします。この十月は明雅先生の七回忌にあたり、しつかり練習することが先生の供養になると思います。おなくなりになるまでご指導をしておられた先生のお姿が思い出されて、このようなときはどうご指導くださるかしたらと、ふっと思っていました。

当日は、母の持っていた大きなお守りを胸に入れ、深呼吸して席につきました。式が進み、宗匠の「執筆、執筆」との声に、立ち上がって進むとき、見学してくださる方々の中に、母の影を見たような気がして、急に心がおちつきました。きつと見守っていてくれたにちがいないと思っています。

付句を頂戴したのは、二十年前、母の見学に来ていた私にお声をかけてくださった孝子さま、淳子さま。良子さまは母のバレーボールのお仲間でした。みなさまと母との思い出はなつかしく、今度はそのみなさまにたくさん助けていただきました。式を進めるにあたり、出演していただいたみなさま、お句をつけてくださった方々、そして応援してくださいました方々に、心からお礼申しあげます。

明雅先生七回忌興行に続き、二十二年四月の藤祭興行の正式俳諧も無事に終わりました。みなさま本当にありがとうございました。

## 天神様はなぜ連歌俳諧の神様なのか

『詩人・菅原道真 うつしの美学』大岡信・著  
鈴木了齋

猫蓑会では毎年、亀戸天満宮・藤祭の行事の一環として正式俳諧を興行し、その作品と、当日実作会の諸作品とを伝統的懐紙に墨書し、後日神前に奉納する。それらの巻々は神社が続く限り保存される。

天満天神菅原道真公は、連歌の守り神だ。かつて、京の北野天満宮連歌会所の奉行は、日本全国の連歌師の総元締のような存在で、宗祇、兼載（本号P14参照）も相次いでその職に就いている。連句すなわち俳諧連歌も連歌の一種なので、天神様は連句の神様でもある。だからこそ私たちの藤祭興行、その正式俳諧は天神様の画像掛軸の前で行われる。

しかしよく考えてみると、道真没後すでに千百年が過ぎている。道真在世当時、短連歌はともかく長連歌はまだ存在しなかったはずだ。それどころか、万葉集と古今集の狭間の和歌衰退期で、文芸の主流は漢詩だった。菅原道真は全盛期に向かう藤原氏に押しつぶされた悲劇の政治家だが、同時に和製漢詩の最高峰を極めた大詩人だ。漢詩だけでなく「東風吹かば……」の和歌でも知られるが、時代が早すぎて連歌にはかかわっていない。

その菅公がなぜ連歌の神様か。公家の本拠地だった京の室町に武家政権を開いた足利氏が、和歌（短歌）を軸とする公家文化に対抗すべく、新文化の軸として連歌を推奨し、道真を連歌の神に据えて、北野天満宮をその中心とした。公家（圧倒的に藤原氏）の和歌文化に対抗する上で、漢詩人でアンチ藤原氏のヒーローだった道真は担ぎやすかったのかも

しれない。ただし藤原貴族の中にも二条良基のように、和歌より連歌に力を入れて公家と武家の融和に努め、そのことを通して公家社会の頂点を確保した政治家もいる。というように、主として政治的文脈からこのことをとらえるのが一般的だろう。

だがその後、天神様は連歌や俳諧のみならず、詩歌全般の守り神として現在まで長く信仰を集めている。一時の政治的な布置がどうこう、といったことよりも深い理由がないと、そうはいかないだろう。前置きが長くなってしまったが、その深層をさぐり、特に道真の詩と蕉風俳諧との関連性について納得度の高い答えを提示しているのが、詩人、大岡信氏による『詩人・菅原道真 うつしの美学』だ。既に刊行後二十年以上経つが、さいわい二〇〇八年に岩波現代文庫の一冊として再刊されている。氏の代表的な日本詩歌論で、同じく連歌俳諧を視野に入れた『うたげと孤心』に較べると、道真という特殊な存在を中心に据えたこの本はさほど知られていないが、いわばその統編的な位置にある。

紙数もないので詳しくは直接同書に当たっていただけしかないが、道真が漢詩と和歌を相互変換するような営為を重ねつつ、その後の和歌本歌取りなども含む、日本独特の「うつし」「うつり」の美学、方法の基礎を固めて行ったこと、その水脈が「うつり・響・句心・位」の蕉風俳諧へ遠く連なっていることが、連句実作者でもある大岡氏ならではの洞察力和説得力をもって語られている。文化の国際的な関係、展開の文脈の中で道真の置かれた位置が、現代の私たちのそれと重なり、いわば道真は私たちの「同時代人」だとの指摘も示唆に富む。解説される道真の詩もみな新鮮で魅力的だ。本書を一読すると、天神様関連の連句興行の興趣が一段と深まる。

## 関係性の文学

小池正博



### 一 親句と疎句

短詩型文学の諸ジャンルはすべて繋がっているから、俳人が短歌や川柳に関心を持ったり、歌人が俳句や川柳との差異や同質性に意識的になったりするのは自然なことである。付合文芸としての連句が解体して一句立てになっていくのが連俳史だとすると、元来、連句は総合的な形式であり、その諸要素がジャンルとして分化していった経緯がある。従ってどの入り口から入っても言葉の光景は同じだと思われるが、まず短歌の話から始めてみたい。たとえば、山崎方代の次のような短歌を私は愛唱している。

こんなにも湯呑茶碗はあたたかくしどろもどろに吾はおるなり 山崎方代

上の句で「湯呑茶碗」という物を描き、下の句で作者の内面を歌う。典型的な短歌の姿に思える。「こんなにも湯呑茶碗は暖かく」が前句だとすると、連句人ならば幾通りも付句を考えることができるだろうが、「しどろもどろに……」と繋がったところに作者の個性が表れているし、表現としても魅力的だ。五七五七七という形式は、連句人の感覚では上の句（五七五）と下の句（七七）の二つのユニットによってできているように見える。けれども、歌人に言わ

せるとそうではなくて、短歌は「五七五七七」という一つの形式なのである。方代の歌にしても、外面（暖かい湯呑茶碗）と内面（しどろもどろな吾）が分離した「腰折れ短歌」ではなく、統一的なひとつの世界にほかならない。

ひじやうなる白痴の僕は自転車屋にかうもり

傘を修繕にやる

前川佐美雄

モタニズム短歌の先駆者であり、関西前衛短歌の祖とも言える前川佐美雄の『植物祭』から、二物衝撃やモンターージュはシュールリアリズムとも通じるものがあると言われる。ロートレアモンの「手術台の上でのミシンと蝙蝠傘の出会い」というフレーズは有名で、掲出の佐美雄の短歌は明らかにこれを踏まえている。無関係に見える二つの事物（あるいは言葉）の間には「見えないはしご」がかかっているのだ。

狂ふべきときに狂はず過ぎたりとふりかへり

ざま夏花揺るる

前登志夫

佐美雄に師事した前登志夫の作品である。狂うべきときに狂いもせず、平穏な人生を過ごしてきたという苦い自覚はだれにでもあるだろう。そういう内面が揺れる夏花に繋がっていく。

近代短歌の例を挙げると、釈道空の「葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を 行きし人あり」に対して、上の句と下の句が分裂しているという批判があったらしい。しかし、この歌は踏みしだかれた葛の花（結果）から山道を行く旅人（原因）を推測したものではなく、連句における発句と脇句との関係として理解すべきなのである。また、斎藤茂吉の「たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙花紅く散りあたりけり」は茂吉の「分からぬ歌」（難解歌）の代表例と言われるが、連句人にとつては難解でも何でもなく、転じの効いた歌として理解しやすいの

ではないだろうか。戦争と鳳仙花との間に何の関係があるのだと問う連句人はたぶんいないだろう。

難解かそうでないかを決めるのは、言葉と言葉がどのように繋がっているかという関係性の問題である。それが短歌の場合は上の句と下の句の親疎の問題として表れる。新古今集の時代に三句切れの歌が多くなり、親句・疎句の歌論も行われたが（藤原定家は「歌には疎句に秀歌多し」と言ったと伝えられる）、これを連歌論に適用したのが心敬の「ささめごと」である。現代短歌においても親疎の議論はときどき短歌誌で特集されることがある。

さて、歌人が連句のことをどのように見ているかは一概には言えないが、連句（連歌）の花の座を詠んだ短歌を一首紹介しておこう。

謀反などはたは易きことながら花の定座と  
いふは恐ろし 長岡千尋

### 二 作中主体は誰か

次に川柳の場合を取り上げてみよう。

脈所を見せて立板申すやう

『誹風柳多留』初篇一三六の作品。「脈所」は手首

の内側の脈搏が見えるところ。それを相手の方に向けて両手を構えた姿勢で、立板に水を流すような口上を述べるのである。では作中主体（主語）は誰か、また、何のためにこのような姿勢をとっているのだろうか。大道易者か薬売りだろうと言う人もある。御殿女中だろうという説もある。連句の場合には前句と付句の二句によって世界が構成されるから比較的文脈が分かりやすいが、川柳は一句独立なので文脈や状況が分かりにくかったり、複数の解釈が生まれたりすることがある。作中主体（主語）が省略されている場合、読者はそれを補って読むことになる

る。前句付の前句が省略されて一句独立した川柳の場合、手がかりは「幻の前句」にしかない。

次に現代川柳の例を挙げてみたい。「裂く」という動詞を使って、加藤久子は次の三句を作っている（『現代川柳の精鋭たち』北宋社）。

水面にひびかぬように紙を裂く 加藤久子  
魚裂く真昼私も存在する

レタス裂く窓いっぱいの人船

「紙を裂く」「魚裂く」「レタス裂く」と裂く対象は異なるが、いずれも印象的な句である。一句目は「紙を裂く」という日常風景を描きながら、そこに水面にひびかぬように」という心理的陰翳をすべりこませている。二句目は「魚裂く」という調理の場面に「私」の存在という強い自意識を浮びあがらせる。三句目は「レタス裂く」と「窓いっぱいの人船」の取り合わせがおもしろく、飛躍感が心地よい。なぜ異人船が来ているのかという問いは、日常的文脈では解けないものである。作中主体は「私」だろうが、生活者の次元の「私」より少し深層の「私」がここでは表現されているようだ。

梟の声が出そうで正座する 広瀬ちえみ  
虫食いの葉っぱをつけてそよぐなり  
流れ着くワカメ、コンブを巻きつけて

ここでは作中主体が明示されていない。虫食いの葉っぱをつけてそよいでいるのは樹だろうが、樹木自身が咳いているような感じもあつて、主語は人間であり「私」ではないかと思えてくる。同様にワカメ、コンブを巻きつけて海辺に流れ着いたのは、何やら異形存在の存在めいた雰囲気がある。梟の声を出すのはもちろん梟ではないのだ。広瀬ちえみは作中主体である主語を消すことによって、逆に書かれていない主体のダブル・イメージ化をはかっている。書かれていない部分は読者の読みに任されているので

あり、どのような文脈で読み取るかは読者の自由である。これってどこか連句に似ていないだろうか。前句付の前句を省略して一句独立した川柳は「幻の前句」を内部構造として含んでいる。

### 三 高橋玄一郎と矛盾付

短歌や川柳などの一首（一句）独立作品における言葉と言葉の関係性は、連句人にとつては「付けと転じ」の関係性として理解することができるだろう。

東明雅氏は本誌「猫蓑通信」において連句の付け方に関連して、詩人の高橋玄一郎について触れている。「高橋氏は連句一巻を非連続の連続と考え、打越にとらわれず、前句と異なるものを付けて行く方法を編み出し、これに矛盾付と言う名称を付けられた」（『猫蓑通信』三十号「空撓考」次ページに転載）  
私はこの矛盾付に興味があつて、その実体を知りたいと思つてしたが、ようやく『高橋玄一郎文学全集』を古本で入手することができた。第一巻『落落抄』収録の「蕉風連句の継承」では、付け方を「具象付」「抽象付」「矛盾付」に分類し、「矛盾付」について次のような説明がある。

「これらは、何れも何かの形で、非連続の連続の形をとっているものと解される。そして、これらの付けは〈句去嫌〉と〈打越〉のはこびを勘案すれば、まさしく、動いて変化することのきわまりない歌仙の根幹をなすものとみなされる。一言でつくせば、矛盾の姿においての付方である」「しかし、付方ははこびの中では、これらの対立し、矛盾するものの根が、きれているようでありながら、しかも、それがつぎの句にうつりはこばれるかわりか、何らかの意味でなければならぬところに、微妙なものが生まれるわけである」「矛盾にいたつて、はじめて運

動があらわれる。つまりこれは、生成よりまた変化するといった運動が主体となるわけである」

玄一郎の連句実作を見たほうが分かりやすそうだ。信大連句会で玄一郎が捌き手をつとめた作品から。

A 宇宙游泳上下左右無し 草平  
喪の家をくぐれば花が舞ってくる 玄一郎

（第一二二回信大連句会「ダム若葉」）  
B 蓮糸で織る浄土曼荼羅 明雅

レルモントフの肩先かくれ花吹雪 玄一郎

（第一五〇回信大連句会「春浅し」）

Aの付句、「宇宙游泳」に対する「喪の家」は空間の矛盾である。Bの付句、「浄土曼荼羅」に対する「レルモントフ」は時間・空間の矛盾である。矛盾・対位するものは上下・左右・男女・静動・遠近・大小・時空などさまざまだろう。自然現象にとどまらず社会事象も矛盾・対位の産物である。矛盾しつつ一筋の繋がりを持つところに言葉と言葉の関係性によるポエジーが生まれる。高橋玄一郎の真意は分からないが、私にはそんなふうに見える。

言葉と言葉をどう繋ぐか。連句の場合は言葉が途中で止まることは許されないから、言葉をどう転がしていくか。言葉の運動は即ち精神の運動である。一句の内部における言葉の関係性は前句と付句との関係性、三句の渡りの関係性へと展開していく。前句に何かがある。それは「題一であったり」「前句」であったり、その他の物や言葉であったりするが、そこから触発されて新しい言葉の光景がさらに展開していくのではないだろうか。

川柳人 連句協会理事 句集『セレクショ  
ン柳人6 小池正博集』（邑書林）、評論集  
『蕩尽の文芸』（まろうど社）

前句と付句との距離が近いのを親句、遠く離れているのを疎句と呼び、従来、連句では物付・心付を親句、それに対して芭蕉の考案した余情付（句付）を疎句と考えるのが普通である。

そして、「疎句に秀句多し」と既に十三世紀の藤原定家が喝破している通り、二つの句を付け合せて、別の新しいものを作るためには、その前句と付句との間に広い空間か、或いは遠い距離があつて、そこに読者の想像が自由に入り得る余地が必要なのである。これは日本画における余白の持つ意味と役目とに似たものであろう。それ故、物付・心付を主とした貞門・談林の俳諧にすぎれた作品が見当らず、余情付（句付）を用いた蕉門の作品によつて、はじめて今日の鑑賞に堪える名作が生まれたと言つてよいであらう。

現代連句は大体、芭蕉の作品をお手本として来たから、付け方も支考の七名八体説の手法を踏襲して来た。しかしながら、近頃はこの物付・心付・余情付（句付）の手法に安住せず、もつと別の新しい手法を考え、これを実作に応用する人たちが現れるようになった。昭和四十五・六年ごろ、信大連句会の故高橋玄二郎氏、都心連句会の故野村牛耳氏そして、その弟

子にあたる村野夏生（わだとしお）氏、山地春眠子氏らによる運動がそれであろう。高橋氏は連句一卷を非連続の連続と考え、打越にとらわれず、前句と異なるものを付けて行く方法を編み出し、これに矛盾付と言ふ名称を付けられた。

① a 肉を挽く肉屋よ月のムンク展 静生

b 独房にきく蟋蟀の雨

玄一郎

② a 砂をはく浅蜩の息の勞れぬし 美紗

b 片足跳びをちんがらといふ きよみ

①のbはaに対し、②のbはaに対してほとんど何の関係もなく並んでいるけれども、その並んでいる事だけで一種のおもしろさを感じるのは事実であり、前句と付句との距離・間隔を最大に取ればこうなる他はないかも知れない。

このような手法は近代詩あたりから輸入されたものであるが、蕉風俳諧の中にも、これに似た手法が全然無かつたわけではない。七名八体の員外とされている空撓そらだめがそれではないかと言われている。

空撓とは無心に前句を吟じ返すうち、前句とは何の付け筋もなく、ふと思ひ浮かんだ姿をもつて付ける方法である。

③ a 障子に影の夕日ちらつく

b 婿殿はどれぞと老の目を拭ひ

支考は右の付合を空撓の証句としているが、

これを敷衍された山地春眠子氏の説を紹介しよう（「二物衝撃の実践的メモ」『鷹九七年六月号所載』）。尤も山地氏の説は俳句の手法に関連しての論で、従つて挙げられた例も俳句であるが、その句が二句一章体である限りにおいては、理論は連句の付合と同じである。

「万有引力あり馬鈴薯にくぼみあり」という句は、次のような付合であろうが、

④ a 万有引力あり

b 馬鈴薯にくぼみあり

私は③a・bの付味と④a・bとの付味にはやはり質的な相違があるように思われ、①a・b、②a・bのあるいは④a・bの俳句の付合を空撓という名で呼ぶ事にはすぐさま賛同出来ないけれども、ただ、一句の中に、あるいは一枚の絵の中に、全く無関係な二つのものを並べると、その中に一種の文学が生まれ、美が生まれる。その事まで私は否定しようとするわけではない。

だから、私は歌仙一卷の中に、このように前句と付句の間が無限にひろがっている句も一・二句まじるのもおもしろいと思う。



無心所着

東明雅

平成年四月十五日刊『猫囊通信』第三十一号より転載

前号に私は空撓そらだちという付け方について述べたが、その空撓に似て非なるものに、無心所着むしんじょやくという付け方がある。

万葉集卷十六に「無心所着の一歌」として、

- 1 我妹子わがもこが 額ひたひに生ふる 双六すむろくの 牡こひの牛うしの 鞍くらの上の瘡かさ（女房の額に生えた双六盤の大きな牡牛の鞍の上の瘡）
- 2 我背子わがせこが 犢鼻たぶなびにする 円石つぶれいしの 吉野の山に 氷魚ひよせぞ懸れる（亭主がふんどしにする丸石の吉野の山に氷魚がぶら下がっている）

の二首が載っている。

無心所着とは、このように歌の各句に別々の事を詠みこんで、一首としての全体の意味が全く通じない歌のことである。

この無心所着は和歌の上でも連歌でも否定され、歌の病と言われて来た。たとえば鎌倉時代の歌論書「八雲御抄」では、著者の順徳院は、つまらないもので、悪く詠めば全く歌の体をなさないと否定し、室町時代の連歌論書「ささめごと」でも、心敬は

1 月やどる水のおもだか鳥屋もなし

2 花やさく雨なき山にかけまくも

などの例をあげているが、彼はこの手法を否定していない代り、肯定もしていない。

和歌・連歌の伝統を濃厚に受け継いだ貞門の俳諧においては、たとえば北村季吟などは、俳諧の祖と言われる荒木田守武の作品につき、

- 1 夕時雨親孝行の雲井にて
- 2 鹿の音ちかきつゞらくしほこ

などに対して、「守武は中比の作者ながら、俳諧をわたくしになぐりて式法をやぶり、花に吉野をも嫌はず、かく無心所着にいひなしたる人なればにや、近代都ほとりには其風用る人なくなり侍し」と非難している。

ところが、京都の季吟がこのような発言をした延宝初年のころ、大阪を中心とする町人文化の発展は、その経済的優位性を背景に、古い文化伝統の破壊とともに新しい俳諧を生み出した。このいわゆる談林派の中心となったのは西山宗因・井原西鶴・岡西惟中の面々であるが、宗因は京都の惣本寺高政に与えて「未茂れ守武流義惣本寺」と詠み、西鶴は、「遠き伊勢国もすそ川の流を三盃くんで酔」ったと守武の系譜をもって自任し、惟中はその著「俳諧蒙求」の題簽に「俳諧蒙求守武西翁流」と書き、すべて歌・連歌においては、一句の義明らかならず、いな事のやうに作り出せるは無心所着の病と判

ぜられたり。俳諧はこれにかはり、無心所着を本意とおもふべし」とまで言っている。

談林の新しい俳諧と一口に言っても、実は宗因・西鶴らの軽口、速吟、惟中の寓言うたがはと方法にはやや異なるものがあるけれども、これが守武流儀の俳諧、無心所着の方法として一世を風靡したのであった。

この談林の新しい俳諧運動は、要するに古い文化伝統に対する否定であり、遠く遡れば有心連歌に対する無心連歌の反逆であり、無心所着も軽口も寓言も要するにその手段でしかなかった。そこに談林俳諧が一時は燎原の火のように燃え上って、全俳壇を制圧したかに見えたものの、遂に芸術的完成を見ず、忽ち衰頹して行った理由があると思う。

先号で述べた空撓という手法は、七名八体の員外とされているが、それは前句に対して意識的に趣向を立てて付けるのではなく、直感的に付ける手法であり、結果として付味のよいものが生まれ出る可能性もあるのに対して、無心所着は一句の中では意味が通らず、付合の場合も前句と付句とのミスマッチを殊更に願って作るものである。作品によっては空撓か、無心所着か分からぬものもあるかも知れないが、作者の意図が分れば紛るまぎることはない。



# 温故知新

2…世阿弥能楽論に見る隙間の魅力

## ●せぬ所の隙

世阿弥『花鏡』より 応永三十一（一四二四）年

見所の批判に云はく、「せぬ所が面白き」など云ふことあり。これは為手の秘する所の案心なり。まづ二曲を初めとして、立ち働き・物真似の種々、ことごとくみな身になすわざなり。せぬ所と申すはその隙なり。このせぬ隙は何とて面白きぞと見る所、これは油断なく心をつなぐ性根なり。舞を舞ひやむ隙、音曲を謡ひやむ所、そのほか、言葉・物真似、あらゆる品々の隙々に、心を捨てずして、用心を持つ内心なり。此の内心の感、外に匂ひて面白きなり。かやうなれどもこの内心ありと他に見えて悪かるべし。もし見えば、それはわざになるべし。せぬにはあるべからず。無心の位にて、我が心をわれにも隠す案心にて、せぬ隙の前後をつなぐべし。これすなはち、万能を一心にてつなぐ感力なり。「生死去来、棚頭傀儡」一線断時、落々磊々」。これは生死に輪廻する人間の有様をたとへなり。棚の上の作り物の傀儡、色々に見ゆれども真には動くも

のにあらず。操りたる糸のわざなり。この糸切れん時は落ち崩れなんと心の心なり。申業も種々の物真似は作り物なり。これを持つものは心なり。この心はば人に見ゆべからず。もしも見えれば、傀儡の糸の見えんがごとし。かへすがへす、心を糸にして人に知らせずして万能をつなぐべし。かくのごとくならば能の命あるべし。

## 《現代語訳》

観客の批評の言葉に「何もしい所こそが面白い」などということがある。これはシテが秘伝とする心づかいの奥義だ。舞と謡という二つの要素をはじめとして、立ちはたらきや様々の演技は例外なくみな身体を使つてする技だが、「しい所」というのは技と技の間の隙間のことだ。この、何もしい間がどういうわけで面白いのかというと、油断なく気をくばる根本的な心の働きがそこにこそ表れるからだ。舞を舞い終えたあとの間、音曲を謡い止むところ、その他、言葉や演技、あらゆる種類の技と技の間ごとに、そこで気を緩めず、気力、集中力を持続させなければならぬ。そうすればその内なる、心意が魅力として外に匂い出る。

そうはいつても、そういう心遣いがはた目にあからさまに見えてしまつてはよろしくない。見えてしまえばそれも小手先の技になり、「しい」ことに

ならなくなる。無心の境地に入り、自分の心を自分でも意識しないような心持ちで、何もしい間の前後をつないで行かねばならない。これこそ、あらゆる技を心一つでつなぐ心力というものだ。「生死去来、棚頭傀儡、一線断時、落々磊々」という偈がある。これは生死を繰り返して輪廻する人間のたとえた。棚車の上の傀儡（操り人形）は作りもので、色々動くように見えるが本当に生きているわけではない。ただ糸に操られているだけで、この糸が切れたときにはたちまち崩れ落ちてしまう。そういう意味だ。猿楽の芸も、様々な演技は作りものにすぎない。これを生きたものにするのは演者の心だ。この心を人に見せてはならない。もし見えてしまつたら、傀儡の糸が見えてしまうようなものだ。くれぐれも、心を人に見えぬ糸のようにして、その心の糸であらゆる技をつないで行かねばならない。そうすればその能には命が宿るだろう。

解題●初の連歌撰集「菟玖波集」の撰者で、初の本格的連歌論「筑波問答」の作者でもある二条良基は、世阿弥の若年の名「藤若」の名付け親でもある。良基は一貫して観世座猿楽の庇護者だった。草創期の能（猿楽）と連歌は、深い相互影響関係にあり、世阿弥の能楽論には、連歌俳諧の観点から見てもきわめて興味深く、触発されるものが多く含まれる。

## 美奈ちゃんのお父さんとK先生

(上)

小野フエラー雅美

信州松本のお城の堀の東端から北へ、浅間温泉の方角にずーっと上つてゆくと、女鳥羽川が作る扇状地の中ごろに位置して、右に信州大病院があります。そしてその手前左手、お城より二〇m高く標高六二二m辺りに大学の附属小・中学校が見えるのです。そこへ私は、お城と女鳥羽川の間くらいにある

神社の裏から、繊維学部を桑畑を通つて、一人増え二人増え、最後は六人くらいになる同級生とぶきけあいながらぶらぶらと時間をかけて通つたものでした。帰りに繊維学部でお蚕さんを貰い、ころころ手の中で転がしては育て、からたちの垣根に、触ると臭い角を出すあげはの幼虫を見つけては、枝ごと持

ち帰って羽化させたり。

木造の学校では夏はプールの声が響き、冬はだるま型の薪ストーブの上で煮えているお湯で、給食の牛乳を瓶ごと温めていたのが割れ、そのお湯はよくミルク色をしていました。厳冬の校長室の掃除当番が当たると、糠袋で磨いていた廊下に水を撒いて凍らせて先生を転ばそうとしたり、毎日二把と決まっていた薪を窓の上と下で示し合わせて吊り上げて是一把余分に焚いたり、食いしん坊の私は職員室のストーブからお葬式饅頭を焼くいい匂いがしたりすると、「小野、お前も食べていくか？」と先生から声が掛かるのを待って近くをうろろしていたり。

美奈ちゃんって可愛い子がいる、とわが東組の男子が西組を覗きに行っているなど思っていたら、中学でおとなしい美奈ちゃんと同じクラスになって



中世都市イートシュタインを行く遠足の列 (08年9月：小野)

時々話すようになりました。「お父さんは大学の先生だつて。それが明雅先生だつたのです。美奈ちゃんとメイ（ゴールデンレトリバー）は今頃何をしているでしょうか？」

大学在学中ドイツの夏季大学の学生生活からエッセイを寄せていた「信濃ジャーナル」という月刊誌（前身は「新信州」）には、高橋玄一郎氏が信大連句会の作品を紹介していて、美奈ちゃんのお父さんの名前が頻出していました。その中の歌仙に明雅捌による「風の宗祇忌」があるのを発見したのは大分経ってからでした。それが、K先生がボンから二年ぶりに帰朝された際の歓迎と筑波へのお別れを兼ねた歌仙だつたのでした。

歌仙「風の宗祇忌」の巻 東明雅 捌

宗祇忌の草山を行く風の尖 静生  
 傾いている月の半身 玄一郎  
 遺伝質 複合人類 冷かに K  
 食事のベルに犬も集まる きよみ  
 日焼の子パンツの跡が湯にゆれて よし  
 無人の駅にしぼむ昼顔 昌三  
 年幾度 開く乳門夏祭り 紫華  
 一つ癖字がよめぬ古俳書 生  
 耳に入るもつれてとけぬ恋の謎 郎  
 Auf Wiedersehen 溜息の橋 K  
 鱗状の毒薬入りし躰着く 郎  
 空の彼方を円盤が飛ばす 素香  
 微酔の至福千年冬の月 華  
 鱈ぶらさげて鱈に似た顔 み  
 「御意見無用」フロントにかかげダンブカー 華  
 無住の寺に琴の音がして 生  
 ほろほろとあさきゆめみし花衣 芹川

四月馬鹿とは俺のことかな  
 ナオ水底に亀のうごめき水温む  
 一戸に一壺蝮酒持ち

焙烙に豆炒る婆の子守唄  
 石ころの道ハイヒール手に

身の奥に育つ炎を知らざりき  
 アレグロいつかピアニシモなり

清姫とあだなの女醫淡く  
 明日は名のみ踊子の脚

しらじらと穂芒に照る月あかり  
 ころろぎいつも真黒けにて

初潮も汚染を憂う漁師町  
 黙礼をして足駄はく僧

ナウ旅愁いま醬油の焦げる団子買う  
 D 51にのる送り雨なり

ライオンと虎の間に仔が生まれ  
 京も春めく菜飯田楽

一斉にとんぼを切つて花四天  
 揃う三味線 撥もうららか

右一九七五年九月一四日 大尾  
 信大連句会第一五七回歌仙作品  
 於 松本市厚生文化会館

「最近、明雅さんは、信大連句の流れの中に「抽象付」の譜を数み、それが「匂い付」をこえるものではないかとの立言をされている。へ移り、ひびき、匂い」という付合いから時間、空間、運動を延べる抽象という空間畏怖の構造が噴き上る。偶然が産み出す偶然ならぬものがある。」（月刊信濃ジャーナル Vol.26、昭和五十年十一月十日発行）と、一九七八年に鬼籍に入られた高橋玄一郎氏は歌仙紹介を結んでいます。（次号に続く）

## 猪苗代兼載五百年祭

林 鐵男

猪苗代兼載は会津の生んだ戦国初期の連歌師である。心敬、宗祇にも比肩する連歌の技量を有し、天才の歌人として当時おおいに声望があつた。

昨年の初夏、この郷土の生んだ連歌師の存在を知り、今年の五百年祭へ向けて催された所縁の小平潟天満宮での顕彰行事に参加した。

このお招きをくださった田中雅子さんは、数年前から会津に在住するようになっていたのだが、近藤蕉肝さんの慫慂で兼載の事跡を検証しているうち、平成二十二年が没後五百年にあたることに気づかれたとのこと。丁度地域行政の文化活動の一環として兼載の事跡顕彰行事が企画されていたこともあり、会津における連句振興の意味合いもあつて、五百年祭記念興行を計画することになったものである。

五百年祭に奉納するために雅子さんが記念百韻の興行を始めたのは、昨年の七月であつた。以来、よすがを求めて全国の連句愛好の方々に百韻参加のお願いを続け、満尾に至つたのは五百年祭目前、今年

五月も下旬のことであつた。多くの時間の経過を必要とした百韻興行だったが、このことが猪苗代兼載という人物の存在を多くの方に再認識してもらう大きな契機になつたものと思う。

さらにさまざまな方々から助言、ご指導をいただき過程で、五百年祭への気運を醸成することができた。俳諧寒菊堂連句振興基金（岡本星女さん）からは多大の支援を頂戴し、これが本行事開催の資金的な基礎となつたのはありがたいことだつた。

五百年祭前日の会津若松市内での連句興行に、各地から参集した連衆は五十余名に及び、会津における近時の連句興行としては空前の規模となつた。興行後の懇親会では地元の伝統芸能である「彼岸獅子」も披露された。

翌日、したたる緑に覆われた会津の山野を、猪苗代湖畔の小平潟天満宮へ向う。その一隅に兼載の新しい句碑が建立され、その除幕式と、百韻の奉納が行われた。

小平潟天満宮は、天曆二年、近江の人神良種が菅原道真の神像をこの地に勧請し霊を祀つたことに始まる。兼載の母がこの天神に願をかけ、百日間通うことで兼載を妊つたという出生譚が伝わるが、どの

## 「まなとも連句会」 昨今 山寺たつみ

「皆さんご苦労さまです。定刻になりました。句会をはじめます。」私の挨拶で句会が始まりました。平成二十二年六月三日、北信濃の小布施町役場小会議室に七名が集まりました。この日は四月八日起首の歌仙「始業式」のナウ六句の付けを仕上げ、満尾

したら全員で校合をすることになっていました。順調に満尾できるか、校合未経験の連衆で校合がうまく行くかと、いろいろ気になるところでした。

膝送りで慶子さんから始まつた付け六句が満尾するまでに二時間を少し過ぎました。私が余計な口出しをして、いささか混乱した場面もありました。校合に入ると問題点の指摘も多く収穫がありました。出席は梅津慶子・栗原威人・栗原良子・新生逢人・八木暉子・平林香織の皆さん。暉子さんは病み上が

ような事情があつてか兼載は三歳にして母のもとを離れ、会津黒川（現在の若松）の天台宗自在院で得度し僧籍に入る。黒川近隣の会所で連歌に親しんだ後、関東に留寓していた心敬のもとに赴いて師事する。宗祇の知遇も得て実力を蓄え、延徳元年、宗祇を継いで北野天満宮連歌会所奉行に任ぜられる。異例の抜擢である。明応三年、堯恵から古今伝授を受けて花ノ本宗匠を称し、四年には宗祇の下で「新撰菟玖波集」の編纂に加わり、連歌師としての地歩を確立する。（連歌師猪苗代兼載「戸田純子」）

しかるに兼載の評価と名声は何故かその後急速に輝きを失い、歴史の断層に埋没する。現代では一部の識者を除き、その業績はほとんど忘れられてしまった。一説には宗祇との思想的対立が原因とも言われるが詳らかではなく、解明が待たれる。

今回、行政および地元の活動も、兼載の業績再評価と顕彰を目指してスタートを切つたところであり、会津での連句文芸の振興をも念頭に置いて、今後ともその展開に注目していきたい。今回おおいに奮闘して五百年祭を支えた田中雅子さんには、会津連句のジャンヌ・ダルクとして更なる活躍が期待されるところである。

りということ、前回に続いてこの句会も付けはせずに出席だけということでした。メンバーには他に、この日欠席の返町淳子・山浦愚草がいます。

この連句会は平成十九年度小布施町公民館主催「まなとも入門講座・連句」（担当・山寺）の受講生を中心に同年九月結成、講座名から「まなとも連句会」といたしました。なおこの句会は平成二十一年度以降小布施町教育委員会から「社会教育関係団体」として認定を受けています。

発足時に次の申し合せをいたしました。

- 一 猫蓑会作法式目を厳守する。
- 二 連衆心を大切にす。
- 三 つねに研鑽する。

それまで五七五にあまりご縁の無かった方もおいでになり、発足時はそれなりに賑やかでした。発足して「連句ROCK」「二十韻」と少しずつ進んでいった句会でありましたが、十九年十二月私が病気で倒れ、二十年十月まで句会に出席できない事態になりました。句会も消滅かとベッドで何度か思っていました。私の病中約十一ヶ月間、世話役を中心に毎月句会が続いていました。世話役のご努力と皆さんの熱意には感謝の他はありません。

「まなとも連句会」には前身の「れんく・イン・おぶせ」の時代がありました。(既報「ねこみの・五十五号」) 手探りで句会を続け、「第十八回国民文化祭・やまがた」に入選もいたしました。メンバーの転出などが重なり句会の維持が難しい状況になりました。そんな時に小布施町公民館の講座を契機に再出発ができて嬉しいことでした。

会員には高齢者も多い句会ですが、この程若くて元気な平林香織さん(猫蓑会員)がメンバーに加わりました。香織さんに句会の印象を伺いますと

「小布施という歴史と個性のある町のたまたまいの中で、いろいろな人生を歩んで来られた方々が、月二回のゆつたりとした時間の流れの中で、お一人お一人が虚心に連句を愉しんでいらっしやる中に入ると、わたしも安心して心を開いて自由に想像の世界に遊ぶことができます」と語っていただきました。

私たちの連句会には、付けが遅いとか、題材が身近に片寄り過ぎるなどいろいろ問題もあります。しかし皆さんが連句を楽しんでいらっしやることを拠り所として、これからも句会を大切に続けて行きた

いと思っています。

「まなとも入門講座・連句」のために貴重な資料をご提供いただいた青木秀樹会長に厚くお礼を申し上げて報告を終わります。(一部敬称略)

### 歌仙「始業式」

山寺たつみ 捌

始業式終えて帰るや残り雪  
穴出た蟻の続く行列

慶子 威人

みどりの日むすび水筒自転車に  
動物園は人で一杯

良子 暁子

屋月に久闊を叙す友の声  
松ぼつくりの落ちる庭先

淳子 たつみ

ウ 剃りたての和尚蕪時く阿弥陀堂  
お茶にしましよと厨から呼ぶ

慶子 威人

婚活に精出す姪の帯を縫う  
三度目だから慣れたお見合い

良子 威人

あらためて草食系をよしとして  
クックブックを探す店先

淳子 威人

風通しいいねとほめる夕涼み  
包の彼方に月浮ぶ夏

慶子 威人

古箏筒整理にぎやか孫娘  
思い出話いつ果てるやら

逢人 香織

写メールにこごみも入れて花便り  
胡蝶越え行く分校の屋根

良子 威人

ナオ 教会の独唱歌手の春帽子  
異常気象を嘆く農民

良子 威人

夕映えに一輪挿しがキラキラと  
聞香済みし部屋の静けさ

逢人 慶子

分け合った石焼芋のあたたかく  
頭巾被って叩く寒柝

良子 威人

ゆつくりとみやげを選ぶ山の宿  
君の瞳にピント合わせる

慶子 威人

慶子 威人

手を振れば彼の乗るバス遠ざかり

人影のない奥社参道  
あれこれとおどけて語る月の客  
入れる襖は鴻山の筆 ※

ナウ 宵の秋鮎に串打つ板暮し  
喜寿の女将が据わるお帳場  
民主党総理辞任と聞く電話

慶子 威人

浮世の夢の覚めてはかなく  
花筏産土の池埋め尽くす

良子 威人

西へ東へ渡る風船

逢人 慶子

連衆 梅津慶子 栗原威人 栗原良子 八木暁子  
返町淳子 平林香織 新生逢人

起首 平成二十二年四月八日 満尾 同年六月三日  
於 小布施公民館

※高井鴻山「文化三年(800)〜明治十六年(883)小布施の豪商農人  
人 画家、妖怪画は有名。葛飾北斎のバトロン。」



六月二十四日例会の連衆。前列左端からたつみ、逢人、慶子、後列左から香織、良子(ながこ)、威人、の面々。逢人さんのご本名は岩崎小弥太、『世界一のパン』チエルシー・パンズ生みの親として知られ、『世界一のパン』というご本にもなっている。《http://www.e-denen.net/syoseki/bans.html》

## ●今後の予定

- 平成二十二年猫養会総会  
七月二十一日(水)  
十一時～十七時(受付十時半より)  
於 江東区芭蕉記念館



## ●俳諧芭蕉忌・明雅忌

- 十月二十日(水)  
於 江東区芭蕉記念館
- 平成二十三年初懐紙  
一月十六日(日)  
於 ホテルフロラシオン青山

## ●猫養基金にご協力ありがとうございます。

- 天の川連句会 平成二十二年一月 六千円
- 神楽坂連句会 平成二十二年四月 二万円
- 源心庵の会 平成二十二年四月 二万円
- 式田恭子様 平成二十二年四月 一万円
- 竹田登代子様 平成二十二年四月 二千元
- 山寺たつみ様 平成二十二年四月 五千元
- 中村ふみ様 平成二十二年四月 三千元
- 篠原達子様 平成二十二年五月 一万円
- 匿名 平成二十二年六月 五千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

## ●作品集・書籍など

- 源心庵の会作品集「行船集」第十四巻

二十二年五月刊

## ●受賞

- 第十四えひめ俵口連句全国大会  
愛媛県連句連盟会長賞  
歌仙「ひととせを」の巻 鈴木了斎 捌

## ●新会員

- 小林八岳 東京都板橋区在住
- 板倉 合 愛知県豊田市在住
- 深津明子 愛知県豊田市在住
- 徳永明子 愛知県日進市在住

## ●同人会新同人

- 内田遊民 ・ 永田吉文

## ●同人会次回当番

- 遠藤央子 ・ 染谷佳子 ・ 根津忠史

## ●猫養例会二十二年当番(芭蕉忌より総会まで)

- 内田遊民 ・ 永田吉文

## ●猫養会公式サイトでの資料一般公開について

猫養会インターネット公式サイト内の「書庫」のページでは、『季刊連句』(一九八三年六月創刊・一九九四年六月終刊)の全バックナンバー、季刊『猫養通信』(一九九〇年一〇月創刊)の全バックナンバー、東明雅著『菅文翁 俳諧聞書』、東明雅先生追悼集『安曇野は昏れて紫』等の各資料をPDF形式のファイルとして閲覧、ダウンロードすることができます。『猫養通信』の第七七号以後については、ファイルから個別の文章をコピーすることもできます。



で、引用などの際にご利用下さい。

この「書庫」は従来、猫養会員のみがパスワードを使って閲覧できる場でしたが、その資料価値に鑑み、今年五月末から一般公開としました。

## ●猫養会公式サイト

《<http://nekominno.cool.ne.jp/>》

## ●猫養同人会第二十回総会が開催されました

六月二十日(日曜日)午前十一時より、新宿ワシントンホテルにて、猫養同人会第二十回総会が開催されました。

原田同人会長挨拶、会計報告、猫養作品集第二十号会計報告、新同人紹介、次回同人会幹事紹介などに引き続き、八卓に別れての歌仙実作、全席披露が行われ、午後五時閉会しました。当日の作品は次号の猫養通信に掲載します。

## ●訂正

●前号(第七十九号)P18上段の一覧表  
「源心庵の会」の開催時間 「13:00」→「11:00」

季刊 『猫養通信』第八十号

平成二十二年七月十五日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社